



日文 701669396

229623

女房・税金・社長殿

目白三平 抗議します

中村武志著



ケイエイ

■中村武志<なかむら・たけし> 明治42年長野
県生れ。法政大学高等師範部卒。大正15年東京
鉄道局に就職，サラリーマン生活38年。職務の
かたわら「目白三平」を主人公とするサラリー
マン作家として活躍。昭和39年3月31日国鉄本
社厚生局厚生課長補佐をさいごに定年退職。

女房・税金・社長殿

目白三平／抗議します

定価三三〇円(千九〇)

一九六六年五月一日初版発行

著 者 中 村 武 志

発 行 者 竹 内 正 治

発 行 所 株式会社 日本経営出版会

(旧称) 日本事務能率協会出版部

東京都渋谷区千駄ヶ谷五ノ一八代々木ビル
電話(別)二四六一(代)・〇六三一(三直)

振替 東京 四八五八五

△検印廃止▽

落丁・乱丁本はお取替えいたします。(東銀座印刷・トキワ製本)

目次

第1章 強き者への抗議

女房殿

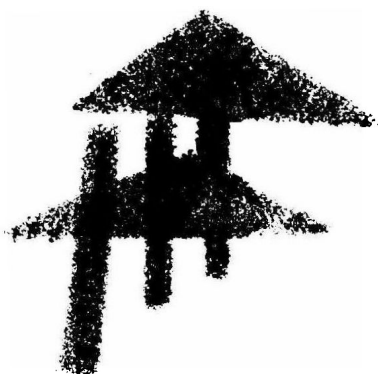
／片手落ちではございませんか

ポンコツになさる気か……………三

二刀流とは卑怯……………五

グチも対等に願いたい……………九

一豊の妻は偉かったナ……………一一



／船だから言おう

ラオス号万才！ 四日間の自由万才！……………三
子どもを利用するのは悪質だ……………五
ヤキモチ焼かれるほどいただきたい……………一六
タクアン三切れ五十円はヒドくないか……………一九
百も承知でお願いするのです……………二

／ムードというものをお忘れか

カラスのほうをほめたい……………二三
こんにちあるのも麻雀のおかげ……………二五
ガソリン詰めるのとワケが違う……………二九

／裏切られたとでもお思いか

バーは男女関係の安全地帯だ……………三
行方不明の亭主二十万人……………三三
検閲はおやめ願いたい……………三六
亭主は二重人格ではない……………三九

／亭主は長生きさせるべし

昔の恋文の悪用は困る……………	四三
腰弁がなゼイカン……………	四四
一番トクな亭主活用法……………	四七
日本の亭主なればこそ……………	五一

税金殿

／みつぎ取りなら男なら……………	五三
紀元節より減税が効果的です……………	五五
“寛容・調和法”を提案……………	五七
国税庁長官宅に泊まりたい……………	六〇
四時間のかなたは無税地帯である……………	六〇
／なぜ“強きにヘツライ弱きをクジク”……………	六三
タネ柿ぐらいいは残しなさい……………	六六
憲法違反です……………	六七
税もなければ栄養ありませんね……………	七二
追放した上にお取り立てとは……………	七二
／上役・佐藤総理大臣へお願い……………	七二

サラリーマンと作家には大減税を！……………七三
ピンハネはいけないことです……………七六
ショバ代稼ぎではありませんか……………七七
差額をお返しいただきたい……………七八
国鉄マンのよしみで支持しますから……………八一

社長殿

／見通し持ってのおふるまいか

うつつ抜かすもご勝手ですが……………八四
無給で働く覚悟はありますか……………八六
九尺二間に住む気はありますか……………八八

／ガタンと評判を落としなさい

ウソの報告にお怒りなら……………九二
料理屋の評判がよいとはクワバラ……………九六
余技の“有名人”とは恐れ入ります……………九八
コストを下げなさい……………九九

第2章 つきあいにくい者への抗議

上役殿

／淋しからずや、オベンチャラ出世術

社長よりあなたのほうが気になる……………一〇五

夫婦喧嘩のとぼちりはごめん……………一〇六

バ！は罪亡ぼしの場……………一〇九

相手は素手ですよ……………一一三

大型オベンチャラはいかが……………一二三

／仕事がやりにくいのです

カンが狂ってはいませんか……………一二五

気まぐれハウツウはおことわり……………一二七

それでは課長どまりです……………一二九

「無欲恬淡」とおすましても困る……………一三一

特別昇給願います……………一二四

／部下の気持ちをどうなさる

「一見紳士風」に反対……………一三五

「一見非紳士風」に賛成……………一三七

そんなにいばるワケが知りたい……………一三九

自問自答の会議をどうぞ……………一四一

社長志願者殿

／こんな社長になぜになりたい

社長をめんどろ見た美談が聞きたい……………一四六

トイレの中の大思案をご存じか……………一四八

新入社員までつけ狙う……………一五〇

歌いましょう「可哀そうな社長さん」……………一五二

第3章 よろしく願いたい者への抗議

マダム・ホステス殿

／どんなつもりか銀座のマダム

通う気持を知ってもらいたい……………一五二

私の酒をなぜガブ飲みするのか……………一五三

鮭の切身以下とはガマンできない……………一五五

私の金をなぜ浪費するのか……………一五七

挨拶ぬきとはゴアイサツだ……………一六〇

／遊んで飲んで取る仕掛け？

主客より金の客？……………一六三

テイク・アンド・テイクとは聞きなれぬ……………一六五

無神経ばかりか取りえもない……………一六七

勘定がわからない……………一七〇

同僚殿

／ほんとのゴマスリをご存じか

みずからスリコギで搦ったものだ——昔のゴマスリ……………一七三

タイコ持ちとは嘆かわしい——今のゴマスリ……………一七五

上役は「ゴマスリ発見器」になれ……………一七六

彦左衛門の悲しい姿を偲ぼう……………一七九

／当世流ゴマスリに危機を告ぐ

努力するより「しない」努力が大変だ……………一八三

「ゴマスリ七本槍」を師と仰ごう……………一八六

スリ込み量で才能の不足分がわかる……………一八八

まるで亭主の七五三だ……………一九一

セガレ殿

／セガレよ、おやじはヌケガラか

万年係長は尊敬しないのか……………一九三

これセガレ、よくよく考えてもらいたい……………一九五

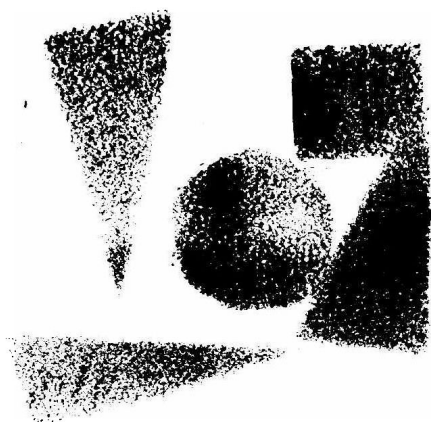
家族はリレー選手だよ……………一九六

今のセガレは「気楽な稼業」だ……………一九九

親子のケジメをつけてもらいたい……………二〇〇

装　　幀／山崎　理
カ　ット／渡木由雄

第1章 強き者への抗議



女 房 殿

／片手落ちではございませんか

ボンコツになさる気か

親愛なる女房に向かつて、イチャモンをつけるのは、いささか気がひける。しかし、他人にたいて、とやかく申しあげるよりは、日ごろから親しくご交際願っている身近な者に、イチャモンをつけるほうが、まだいいと目白三平は考える。

これまでに目白三平は、新聞や雑誌に、女房へのお願いをくどくど書き続けて来た。ある時は低姿勢で、ひたすら懇願し、時によっては計画的に威猛いびん高なはげしい調子で責めたてたものであった。

目白三平が低姿勢の場合には、彼女は、軽く受け流して、意にもとめぬ様子であった。高姿勢で行くと、先方は彼以上に威猛高になって反ばつする。どちらにしても、彼のお願いやらイチャモンは、お聞き届けいただけにいままに今日にいたっているのである。しかも、亭主の立場は、いよいよ苦しく、ますます理解されない状態に追いこまれて来ている。

苦しまぎれに、今更ながらくだしくイチャモンをつける風流味のないしぐさを、目白三平はお許しいただきたいのである。

亭主を機関車の機関士にたとえると、一番話がわかりやすい。言うまでもなく、機関車は客車を引っぱってレールの上を同じ方向へ走っている。機関士とお客さんも同様である。機関士を亭主とすると、お客さんは女房ということになる。

同じ方向へ、同じ生命と境涯を托して走っているというだけの理由で、機関士もお客さんも同じだという錯覚が女房にはあるようである。これはとんでもない考えちがいである。

機関士は、何百、何千というお客さんの貴重な生命を預かって、目的地まで無事に運んで行かなければならない責任を負っている。それにくらべて女房というお客さんのほうは、窓から景色を眺め、ぼりぼりとピーナッツを食べ、ミカンの皮をむいているだけでいいのである。

主婦業は、そんなに楽ではないと、女房は反論するにちがいない。その通りである。しかし、少なくとも、機関士のように、人命を預かっていないことはたしかであると、目白三平は確信す

るのである。あなたのためにも、亭主機関士をポンコツにしていただきたくないのである。

二刀流とは卑怯

目白三平は、せんだって、テレビで、ある人生記録という番組を、身につまされる思いで見たばかりである。主人公は、秋田鉄道管理局横手機関区の高橋三次郎さんである。息子さんが機関助手として、同じ機関区で働いている。父親の後を継ぐわけである。

定年が近いので、高橋さんは、最後のお願いを区長に申し出た。それは、機関助手の息子と組んで一度汽車を運転させて貰いたいということであった。

高橋さんは、ここ三十何年も、急勾配の難所のあるローカル線で運転を続けて来た。そして彼は、一度も失敗をしなかったのである。急勾配での罐^{かま}の焚^たき方も運転も難かしい。蒸気があがらなければ、坂の途中で汽車はとまってしまふ。最悪の場合には、麓の駅へ後戻りしてしまうのである。

横手機関区長の好意で、定年間近の高橋三次郎機関士は、息子の機関助手を伴って、急勾配を乗り越えるコツを伝授するために、機関車に乗って出発して行ったのである。

これは美談でもなんでもない。国鉄職員としては当然のことだとも言える、ささやかな一つの

出来ごとに過ぎないのである。ただ私がここで言いたいのは、同じレールの上を走っていても、機関士とお客さんとは、こんなにもちがうということなのだ。女房であるお客さんのほうは、みちのくの紅葉の美しさにうっとり、見とれていい。それに引きかえて高橋機関士は、三十九年の間、機関車の窓からは、紅葉の美しさをしみじみと味わったことはないにちがいない。彼はテレビの中で、定年間近で秋が深い、という内容の俳句を披露していたが、これは機関車運転中に出来た作ではないだろう。勤務中には、そんな余裕はないからである。

同じ汽車に乗っていても、機関士とお客さんとは、こんなにもちがうのである。このちがいが、どこから来たかと言え、言うまでもなく、王朝時代以来千余年にわたる女子教育のおかげである。女性は貞淑第一に、ただ黙々と男にしたがっていれば、それがもっとも美しい姿であると考えて来たわけである。

ところが、ご存じのように、戦後は、男女同権が唱えられ、女権が大いに拡張されたために、現在の女房は、両刀を腰にさしているという形なのである。つまり、黙って服従しているほうが都合のいい場合には、昔同様の貞淑主義を守り、都合が悪くなると、男女同権というもう一つの刀を振りかざして攻撃するのである。格言にも、人を見たら泥棒と思えというのがあった。また、渡る世間に鬼は無し、という全然反対のものがあるが、女房の二刀流は、これと同じように、それを少しも矛盾と感じないで、その時々によって、都合のいい刀を使っているのである。